

# 第 638 回

## 日本小児科学会東京都地方会講話会

### プロ グ ラ ム

日 時 平成29年7月8日(土) 午後2時00分

場 所 東京女子医科大学 弥生記念講堂



#### 世話人

プログラム係 福原 大介  
杏林大学小児科 0422(42)5511

(FAX) 0422(47)8184

会場係 伊藤 康  
東京女子医科大学小児科 03(3353)8111

(FAX) 03(5269)7619

事務局 03(5388)7007

e-mail: jpstokyo-office@umin.ac.jp

#### 次回以降開催予定日

平成29年9月9日(土) 飯田橋レインボービル7F

平成29年10月14日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂

平成29年12月9日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂

平成30年1月13日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂

平成30年2月10日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂

# 第638回 日本小児科学会東京都地方会講話会演題

(1題6分、指定発言5分、追加討論3分以内、厳守のこと。○印演者)

第1グループ 14:00—14:30

座長 一色 恭平（さいたま市立病院小児科）

## 1) 造血幹細胞移植後に総胆管結石症を合併した1例

○池山 志豪<sup>1)</sup>、真野 純子<sup>1)</sup>、日高 もえ<sup>1)</sup>、鈴木 辰典<sup>2)</sup>、三谷 友一<sup>1)</sup>、半谷まゆみ<sup>1)</sup>、閔 正史<sup>1)</sup>、樋渡 光輝<sup>1)</sup>、滝田 順子<sup>1)</sup>、岡 明<sup>1)</sup>（東京大学小児科）<sup>1)</sup>、（同 消化器内科）<sup>2)</sup>

症例は10歳女児。乳児白血病にて3回の造血幹細胞移植、肺GVHDに対して9歳時に脳死肺移植を施行された。肺移植後より嘔吐発作を認め、背部痛も出現した。10歳時の身長86.5cm、体重8.5kg。腹部CT所見より総胆管結石症と診断し、内視鏡的排石を行い、症状の改善を得た。小児胆石の原因として中心静脈栄養の既往があり、本症例との関連が考えられた。

## 2) 著明な白血球数の増加と腹水を伴った一過性骨髓異常増殖症の1例

○金田 朋也、星野 顯宏、西村 聰、青木 龍、森丘千夏子、滝 敦子、今井 耕輔、高木 正穏、金兼 弘和、森尾 友宏（東京医科歯科大学小児科）

一過性骨髓異常増殖症（TAM）の多くは予後良好であるが、発症時の白血球数増加や浮腫の存在は予後不良とされ、救命できない場合もある。出生時から著明な腹水があり、日齢1の白血球数は27.7万/ $\mu$ L（芽球95%）と著増していたTAMの1例を経験した。交換輸血と少量シタラビンを含めた集中治療によって救命し得た。

## 3) 退形成上衣腫の加療中に急性リンパ性白血病を発症した1例

○木原 祐希<sup>1)</sup>、金子 裕貴<sup>1)</sup>、鶴田 敏久<sup>1)</sup>、千葉 幸英<sup>1)</sup>、済陽 寛子<sup>2)</sup>、松岡 綾子<sup>3)</sup>、千葉謙太郎<sup>3)</sup>、藍原 康雄<sup>3)</sup>、林 基弘<sup>3)</sup>、永田 智<sup>1)</sup>（東京女子医科大学小児科）<sup>1)</sup>、（同 小児外科）<sup>2)</sup>、（同 脳神経外科）<sup>3)</sup>

10歳女児。退形成上衣腫のため5年以上に渡り、開頭術（計10回）、全脳全脊髄照射、化学療法の治療歴あり。経過中、白血球数の著増（63,530/ $\mu$ L、芽球97%）が認められ、B前駆細胞性白血病と診断された。大量シタラビン療法などを施行し、血液学的寛解を得、 $\gamma$ ナイフ治療により脳腫瘍のコントロールを行っている。

第2グループ 14:30—14:50

座長 生田 陽二（公立昭和病院小児科）

## 4) 乳児期早期に閉塞性無呼吸を呈したFOXP1異常症の1例

○丸山 篤志<sup>1)</sup>、坂口 友理<sup>2),3)</sup>、武内 俊樹<sup>2)</sup>、肥沼 悟郎<sup>2)</sup>、下郷 幸子<sup>2)</sup>、上原 朋子<sup>3)</sup>、小崎健次郎<sup>3)</sup>、高橋 孝雄<sup>2)</sup>（慶應義塾大学卒後臨床研修センター）<sup>1)</sup>、（同 小児科）<sup>2)</sup>、（同 医学部臨床遺伝学センター）<sup>3)</sup>

出生時から小頭症を認め、乳児期早期に閉塞性無呼吸・発達遅滞・不随意運動を呈した8歳男児。遺伝子検査で非典型的Rett症候群の原因遺伝子であるFOXP1に変異を認めた。FOXP1遺伝子異常症は典型的Rett症候群と異なりこれまで呼吸器系の異常の報告はないとなっていたが、筋緊張低下や小顎により閉塞性無呼吸をきたす可能性がある。

## 5) 内反足として経過をみられていた瀬川病の1例

○浦辺 智美<sup>1)</sup>、森 朋子<sup>1)</sup>、竹下 美佳<sup>1)</sup>、森下那月美<sup>1)</sup>、森地振一郎<sup>1)</sup>、石田 悠<sup>1)</sup>、  
小穴 信吾<sup>2)</sup>、山中 岳<sup>1)</sup>、新宅 治夫<sup>3)</sup>、河島 尚志<sup>1)</sup> (東京医科大学小児科)<sup>1)</sup>、  
(東京医科大学八王子医療センター小児科)<sup>2)</sup>、(大阪市立大学小児科)<sup>3)</sup>

12歳女児。6歳頃から転倒しやすく他院にて内反足として経過をみられていた。11歳当院紹介受診時、右上下肢ジストニア、筋緊張亢進を認め、症状が午後に悪化する日内変動があることが判明した。遺伝子検査にて瀬川病の確定診断に至り L-dopa にて臨床像は改善した。治療可能な疾患を念頭に置き、詳細に問診することが重要だと思われた。

休憩 14:50—15:00

感染症だより 15:00—15:20 (講演:15分+質疑応答:5分)

座長 和田 紀之 (和田小児科医院)

多屋 馨子 (国立感染症研究所感染症疫学センター)

教育講演 15:20—16:20 (講演:50分+質疑応答:10分)

座長 麻生 誠二郎 (麻生小児科医院)

川崎病発見50年を迎えて

川崎 富作 (日本川崎病研究センター理事長)

小児科医になって10年目、1961年1月の寒い当直の晩、4歳3か月の男児が急患で入院した症例が私の人生を大きく変えた。6年間で50例を集め、1967年3月医学雑誌「アレルギー」に発表した。1970年に研究班が結成、第1回目の全国調査が実施され、2015年までに23回行われている。

川崎病は症状が比較的明らかなため、すぐに原因が明らかになるものと考えられていたが、原著発表50年を迎えた今も手がかりがつかめていない。これから多くの研究者が、川崎病の原因解明のために挑戦してくれることを願っている。

第3グループ 16:20—17:00

座長 吉田 菜穂子 (慶應義塾大学感染症学教室)

## 6) *Yersinia enterocolitica* 肺炎の1例

○細井 美都、末永 祐太、袖野 美穂、吉本 優里、大熊 喜彰、山中 純子、瓜生 英子、  
水上 愛弓、佐藤 典子、七野 浩之 (国立国際医療研究センター小児科)

5歳女児。3日間の発熱と下痢・右下腹部痛で受診し、画像で回盲部炎と診断した。抗菌薬(セファタキシムとクリンダマイシン)が著効した。便培養は検出しなかったが、ペア血清で *Yersinia enterocolitica* (*Y.ent*) 08群が陽性であった。感染経路は不明であった。虫垂炎症状の鑑別に *Y.ent* 感染症が重要である。

指定発言 小西 典子 (東京都健康安全研究センター微生物部食品微生物研究科)

7) 2016年に東京都文京区で発生した百日咳の地域流行について

- 森 蘭子<sup>1)</sup>、新橋 玲子<sup>2)</sup>、奥野 英雄<sup>3)</sup>、多屋 馨子<sup>3)</sup>、渡邊 愛可<sup>3)</sup>、神谷 元<sup>3)</sup>、  
島田 智恵<sup>3)</sup>、松井 珠乃<sup>3)</sup>、平松 征洋<sup>4)</sup>、大石 和徳<sup>3)</sup>  
(森こどもクリニック)<sup>1)</sup>、(国立感染症研究所感染症疫学センター (FETP))<sup>2)</sup>、  
(同 感染症疫学センター)<sup>3)</sup>、(同 細菌第二部)<sup>4)</sup>

2016年5～7月に東京都文京区で、百日咳の地域流行が発生した。年長の幼児～低学年の学童での罹患が多く、そのほとんどが規定通りにワクチン接種を受けていた。保育所等の集団生活の場で感染が広がり、さらに家族内感染でワクチン未接種の乳児への感染も見られた。地域での流行の拡大を阻止するために、多くの医療機関での情報共有が重要である。

指定発言 蒲地 一成 (国立感染症研究所細菌第二部)

8) 慢性再発性多発性骨髓炎 (CRMO) が疑われた2歳男児例

- 瀬戸比呂木<sup>1)</sup>、峯 佑介<sup>1)</sup>、西村 光司<sup>1)</sup>、春日 悠岐<sup>1)</sup>、田邊 聰美<sup>1)</sup>、小川えりか<sup>1)</sup>、  
青木 政子<sup>1)</sup>、鈴木 潤一<sup>1)</sup>、石毛 美夏<sup>1)</sup>、平良 勝章<sup>2)</sup>、浦上 達彦<sup>1)</sup>、渕上 達夫<sup>1)</sup>  
(日本大学小児科)<sup>1)</sup>、(同 整形外科)<sup>2)</sup>

症例は2歳男児。遷延する断続的な発熱と繰り返す多発性の下肢痛を主訴に来院し、有症状時の下肢MRI検査で骨髓浮腫が示唆されたことからCRMOを疑った。確定診断には骨生検を要するが、年齢を考慮し未施行である。CRMOの報告は本邦では稀であり、未就学男児例の報告はさらに少なく、文献的考察を加え報告する。

第4グループ 17:00—17:20

座長 佐藤 武志 (慶應義塾大学小児科)

9) 飲水過多とウイルス感染症にともない症候性低ナトリウム血症を呈した1例

- 近藤 優帆、元吉八重子、小野 静香、牧浦亜紀子、松原 直己、弘田由紀子、松原 洋平、  
清原 鋼二 (東京北医療センター小児科)

1歳女児。発熱3日目に痙攣。初発の痙攣であり群発したため精査実施したが、頭部CTや髄液検査に異常はなかった。血液検査ではNa 115mEq/Lであり、これが痙攣の原因と考えられた。病歴を聴取すると、発熱後はほぼ水だけを1日2L摂取していた。入院後はNaの補正にともない全身状態は改善し、痙攣の再発もなかった。

10) 多臓器不全を伴う高アンモニア血症に対して持続血液透析 (CHD) を行い救命し得たCPS1欠損症疑いの女児例

- 石田 翔二、仲川 真由、山崎 晋、岩崎 友弘、池野 充、遠藤 周、春名 英典、  
田久保憲行、久田 研、清水 俊明 (順天堂大学小児科)

症例は日齢3の女児。在胎40週、2,532gで出生し、活気不良から急激に多臓器不全となり、当院へ転院となった。血中NH<sub>3</sub>値2,560 μg/dLと上昇を認めCHDを開始した。アミノ酸、尿中オロト酸、タンデムマスの分析でCPS1欠損症を疑い遺伝子検査を提出した。日齢16にCHDより離脱し、日齢76に退院した。文献的考察を加えて報告する。

## 【運営委員会だより】

1. 第 638 回講話会（平成 29 年 7 月）のプログラム編成について報告がありました。
2. 第 638～640 回講話会の教育講演および感染症だよりについて、講師と座長が確認されました。
3. 次期プログラム委員を、杏林大学小児科の福原大介先生にお願いすることになりました。
4. 7 月に開催される幹事会の議題案について確認されました。
5. 平成 29 年 10 月より実施予定の領域別研修会の参加証引換券と参加証の配布方法について話し合われました。
6. 東京都地方会で作成する「緊急時を念頭にしたマーリングリスト」について、これまでに 569 名（全会員の 24%）の登録があったことが報告されました。
7. 第 637 回講話会（6 月）の出席者は 259 名、ベビーシッタールーム利用者は 4 名、前回講話会以降の新入会者 11 名、退会者は 1 名でした。

## 【演題の申し込みについてのお願い】

- ・ 動画が含まれる場合には、その旨を明示して下さい。
- ・ 原則として指定発言をつけて下さい。（共同演者から指定発言は頂けません）
- ・ 演題の締切は次のようになります。
- ・ 運営委員会にて抄録の修正をさせて頂く事もございますので、原則としてご了承下さい。

講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切
平成29年1月	前年 11 月 30 日	2月	前年 12 月 25 日	3月	1月 31 日
5月	2月 28 日	6月	4月 30 日	7月	5月 31 日
9月	6月 30 日	10月	8月 31 日	12月	9月 30 日

申込演題が規定数を上回った場合、さらに 1 回先になることがありますのでご了承下さい。

その場合、事務局よりご連絡します。

## 【演者の先生方へのお願い】

- ・ 一次抄録は 160 字以内に。また、二次抄録は日本小児科学会雑誌に掲載されますので規定の 200 字以内を厳守くださいようお願い致します。(原稿はワード入力で e-mail にて事務局へお送り下さい。)
- ・ 出席した会員に発表の意味をより強く、明確に伝えるために、最後(または適切な時期)に Take Home Message (この発表から学ぶこと) を手短な一文で記したスライドを付け加えていただくようお願い致します。

## 【会員登録事項の変更届についてのお願い】

- ・ 自宅、勤務先の住所（プログラム送付先）等の変更または、改姓があった場合は、速やかに東京都地方会事務局までご連絡下さい。
- ・ 退会される場合も必ずご連絡下さい。そのお届けがない場合は次年度も継続として年会費の請求を致します。

東京都地方会事務局 e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp / FAX : 03 (5388) 5193

## 【事務局よりご連絡】

- ・ 7 月講話会では書店が出展し、書籍の展示販売を行います。

## Presentationについて

発表は Computer Presentation (Windowsのみ可、Macは不可) のみで受け付けます。MacのPC持ち込みによる発表はご遠慮下さい。Powerpoint 2000以上で作成、Font 文字は Powerpoint 備え付けのみ。CD-RもしくはUSBメモリーにて、第1、2 グループ発表者は午後1時30分までに、第3 グループ以降の発表者は午後3時までにスライド受付まで持参して下さい。機器操作は、当方で行います。あらかじめウイルス checkをお願い致します。

## 動画について

動画の発表にはトラブルが多いため、下記の方針をご理解いただきますようお願い致します。

- ① 一般演題での動画の使用はできる限りお控えいただくようにお願い致します。
- ② 動画の使用が不可避と考えられる場合、ファイルのセーブ法などの注意事項がありますので、学会事務局に必ず事前にご連絡下さい。
- ③ ②の場合にも、動画の映写にトラブルがあったときに備え、静止画像のみで構成された代替パワーポイントファイルをご用意下さい。当日、動画の映写が不可能と判断された場合には、代替パワーポイントファイルを用いて、時間通りに学会を進行させていただきますことをご了承下さい。

## 〈ベビーシッタールーム開設のお知らせ〉

乳幼児を同伴される方のために、ベビーシッタールームを開設します。利用ご希望の方は、利用日の1週間前までに問診票をダウンロードし、必要事項を記載の上、事務局へe-mailまたはFAXでお申し込み下さい。問診票は東京都地方会ホームページにございます。利用当日、お子様が好きな食べもの・飲料・おもちゃ・着替え・おむつなどに名前を付けてご持参下さい。キャンセルされる場合は、3日前までにご連絡をお願い致します。連絡のないキャンセルの場合は、次回以降の利用をご遠慮頂く場合がございます。なお費用は学会が負担致します。

日本小児科学会東京都地方会事務局 TEL 03-5388-7007/FAX 03-5388-5193  
e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp

# 月刊誌「小児科臨床」のご案内

月刊誌「小児科臨床」は、1948年創刊以来一貫して小児科学の投稿誌としてのスタンスを守り、若い小児科医の研究発表の場として活用されています。

弊誌は増刊号を含めて年間13号を発刊し、小児医療・小児保健に関わる多くの先生方から、日常の臨床に役立つ雑誌としてご好評頂いております。

### 編集顧問

加藤精彦・早川浩

(第69巻2016年)

4号 特集

小児慢性疾患の成人期移行の

現状と問題点

### 編集委員

別所文雄・水口雅・岩田敏・松山健

増刊

Q&Aで学ぶ

小児の画像診断のポイント

### 発 行

月刊(毎月20日発行・土日祝は繰り下げ)

12号 特集

子どもの事故・虐待

### 定 價

普通号(年10回) 本体 2,600円+税

(第70巻2017年)

特集号(年2回) 本体 4,700円+税

6号 特集

増刊号(年1回)

ここがポイント

年間購読料(前納) 本体 41,600円+税

小児診療ガイドラインの使い方

